
韓国における、「きゅうり、トマト、すいか、パプリカ」の 生産、輸出等の動向

平成 14 年 11 月 11 日（月）～ 20 日（火）にかけて行った、生鮮野菜輸入先国生産出荷動向等調査事業に係る韓国現地調査の概要を報告する。

今回の調査では、「きゅうり、丸トマト及びミニトマト、すいか、パプリカ」を主体に行い、ソウル広域市、扶余市、全州市、金堤市、光陽市、和順市、晋州市、宜寧市、昌原市、金海市、釜山市の主産地に位置する産地、企業を中心に聞き取り調査を行った。

「きゅうり」は、今回光陽市、晋州市の 2 産地を調査した。

光陽市は台風の被害により、再定植をした産地もあり、12 月中旬より出荷を開始するということがあった。晋州市では収穫が始まっており 2 月下旬頃まで収穫するとのことで、生育状況は順調であった。

「ミニトマト」は扶余市、光陽市、和順市、金海市の 4 産地で調査を行った。

どの産地も収穫期であった。生育状況は概ね良好。5 年以上の経験を持っている生産者がほとんどであり、特に大きな生産量の変化はなかった。しかし、ミニトマトは韓国内の需要が伸びており、また、2002 年、韓国は冷害と台風の影響で野菜類の価格が高騰したのに対し、日本市場は安値であったことから、輸出量は減り、国内流通へと多くが流れた。

「丸トマト」は宜寧市で調査を行った。

定植後 2 週間目の生育期であった。生育状況は概ね良好。

「すいか」

2003 年のすいかの栽培面積は 2002 年の価格が全般的に高く推移したことより、ハウス栽培は 2% 程度増加するものの、露地栽培は大幅に減少することが見込まれるとし、全体栽培面積は 2002 年と比べて減少するとの見込みである。

「パプリカ」は、全州市、金堤市、和順市、晋州市、昌原市の 5 産地を調査した。

いずれも収穫初期であった。今回訪問したパプリカ農家はほとんどがオランダ方式のガラス温室栽培によるものであり、パプリカの栽培を始めて 5 年程度経っている生産者で、単収もほぼ 50kg/坪以上と安定しており、今年の作柄状況も良好とのことである（収穫期は 10 月～翌年 7 月）。

パプリカの今後の動向は、一部地域では、価格の変動、競争が激しいことから、他品目へ転作するものが増えてくるのではないかとの見通し。一方、農家によっては今後の市場開拓を含めて規模拡大を図りたいとの考え方を持っていた。

韓国の流通の様子



ソウル市内にある農協系列のハナロマート（量販店）陳列風景 右は有機野菜コーナー



可楽洞市場に出荷されたミニトマト



可楽洞市場に出荷されたきゅうり

可楽洞市場はソウル市全体の農水産物需要の50%を取扱い、全国の4分の1の入荷量を誇る韓国一の卸売市場である。

1.調査行程地図



参考

2002年11月11日現在 韓国 1won=0.0975円

2.韓国からの2002年の輸入状況の概況

2002年の韓国からの輸入状況を見てみると、表1より分かるように、トマト、きゅうり、なす、すいかにおいて数量、金額ともに減少し、輸入数量、輸入金額ともに増加したのは、ジャンボピーマン(パプリカ)のみである。トマトでは数量にして39%、きゅうり43%、なす83%、すいか30%と前年と比較して大幅に減少した。

韓国からの2002年輸入数量の減少要因は、主に韓国国内の多雨、曇天、日照不足及び台風による作柄の不良により韓国国内の市場価格が上昇したことによる。

(表1) 2002年1月～2002年12月 韓国からの生鮮野菜の輸入状況

(単位：kg、千円、円/kg、%)

品名	2002年1月～2002年12月累計			前年対比		
	数量	金額	単価	数量	金額	単価
トマト	3,204,675	830,568	259	39	49	125
きゅうり及びガーキン	3,405,025	641,963	189	43	47	111
なす	1,609,892	368,480	229	83	84	101
ジャンボピーマン	12,290,025	3,557,351	289	111	102	92
すいか	481,300	79,091	164	30	37	123
その他の生鮮野菜	4,997,329	4,088,116	818	44	81	187
計	25,988,246	9,565,569	368	61	78	127

資料：野菜供給安定基金「VINAS」、原資料：財務省「貿易統計」

注：その他の生鮮野菜には、上記品目以外のものを含めている。

3.調査地の概要

今回調査を行ったのは、11都市であり、道別でいうと、ソウル広域市、忠清南道、全羅北道、全羅南道、慶尚南道、釜山市広域市などの韓国南部地域が中心であった。各都市及び道の概要は表2のとおり。

(表2) 市・道別の作物別栽培面積(2000)

単位：ha

	栽培面積	糧穀作物	野菜	特用作物	果実	桑	その他の 飼料作物	施設栽培	その他
合計	1,888,765	1,316,504	295,764	78,385	169,388	595	24,532	105,758	107,115
ソウル	2,101	758	493	20	83	-	151	1,558	25
釜山	9,868	5,883	3,841	88	172	-	264	1,575	211
大邱	11,825	7,149	2,703	417	1,697	-	271	1,544	233
仁川	24,413	18,650	2,811	617	403	-	269	1,575	562
光州	14,081	10,320	2,226	478	773	-	189	2,839	544
大田	6,398	3,375	670	454	980	-	247	931	300
蔚山	14,479	9,872	1,178	206	1,842	-	175	513	309
京畿道	211,195	138,225	24,401	8,202	9,609	22	5,125	18,020	15,156
江原道	117,456	73,974	29,071	5,146	2,155	42	1,175	2,824	7,489
忠清北道	134,587	77,964	22,845	8,293	13,266	75	1,914	3,647	16,778
忠清南道	256,838	188,160	27,837	10,800	12,386	77	3,310	13,086	13,923
全羅北道	217,487	173,901	26,364	8,053	6,374	122	3,290	8,255	13,222
全羅南道	332,351	292,685	67,168	14,578	16,781	95	2,646	11,520	9,569
慶尚北道	296,692	167,908	44,118	11,703	56,099	92	2,780	14,262	19,261
慶尚南道	179,792	132,514	23,922	5,454	21,079	70	2,338	21,043	7,603
済州島	59,207	15,166	16,116	3,876	25,689	-	388	2,566	1,930
日本	4,563,000	2,340,900	619,500	190,700	286,200	5,880	1,026,000	*70,525	94,000

資料：韓国...国立農産物品質管理院（上段は広域市で下段の道に含まれていない）

日本...農林水産省「平成12年農作物作付(栽培)延べ面積及び耕地利用率」

農林水産省「園芸用ガラス室・ハウス等の設置状況」平成12年8月

注：韓国の野菜栽培面積は露地栽培面積である。日本の野菜栽培面積には施設栽培面積を含んでいる。

*日本の施設栽培70,525haは栽培面積4,563,000haに含まれない。

4.調査品目の概要

(1)きゅうり

韓国のきゅうりの主要産地は、露地栽培では、洪川郡150ha、瑞山市75ha、威陽郡64ha、華川郡64ha、施設栽培では、春川市255ha、昌寧郡187ha、順天市175ha、扶余郡170ha、晋州市166ha、南陽州市156haとなっている(表3)。また、きゅうりの2002年日本輸出は、2002年の天候不順から韓国国内市場の価格が高騰したこと、また、2001年の輸出価格が低落したことから、生産者が輸出用品種から国内用品種に変更したことにより大幅に減少した(表4)。

(表3)きゅうりの韓国における栽培状況(2001年)

順位	施設		露地	
	都市名	作付面積(ha)	都市名	作付面積(ha)
1	洪川郡	150	春川市	255
2	瑞山市	75	昌寧郡	187
3	威陽郡	64	順天市	175
4	華川郡	64	扶余郡	170
5	牙山市	57	晋州市	166

資料：韓国農林部

(表4)韓国からのきゅうりの輸入数量

単位：千t

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
2000	630	385	490	445	254	123	68	48	30	590	1,185	1,334	5,582
2001	640	483	989	953	700	297	116	107	91	295	1,653	1,636	7,960
2002	816	336	466	288	99	70	55	29	9	14	326	897	3,406

資料：野菜供給安定基金「VINAS」原資料：財務省「貿易統計」

ア．光陽市

日本輸出用きゅうりの品種は、白いぼ系アルファふしなり、百成、ペクソンを採用し、作型は播種が9-10月、定植10月末、収穫が11月～翌2月であった(表5)。きゅうりは、前述のように2001年の輸出価格が低落したため、2001年と比べて2002年は輸出用きゅうりの生産者は半減したとのこと。訪問した生産者は、洪水による冠水により再定植を行い出荷時期が例年より遅く、12月中旬からとのことであった。

日本との契約方法は面積をシーズンごとに取り決める。契約価格は過去の市場価格の最高価格と最低価格の間を取って設定するとのことだが、実際は現況市場価格に左右され、農家との契約価格の遵守が厳しい時もあるとのこと。

イ．晋州市

晋州市は慶尚南道に属し、上述の光陽市と同様に韓国の南部地域に位置する。晋州市は市をあげて野菜の輸出促進に力を入れており、パンフレットも日本語、中国語、英語で作成されて、市の農産物のPRをしている産地である。晋州市のきゅうりの輸出概況としては、近辺の50戸のきゅうり農家が集まり団地を形成して行っていた。9月27日に定植したものが、1.5mほどに成長しており、収穫が始まっていた。収穫時期は11月3日から2月末で、生育状態は良好であるとのこと(表5)。

(表5)各産地の作型及び生育状況

都市名	定植期	収穫期	調査時の状況
光陽市	10月末	12月中旬～	生育期
晋州市	9月27日	11月～翌2月	収穫初期

ウ．今後の展望

韓国国内向け品種と輸出用品種が違うことにより輸出用品種を国内に出荷することが難しく、輸出用品種の生産を増加することは困難な状況であることや韓国国内の価格が2002年は高く推移したこともあって、2003年は輸出用品種の生産量は減少するものと見込まれている。



光陽市 定植 20 日目のきゅうり



晋州市 きゅうり (百成 2 号)

(2) トマト

韓国のトマトの主要産地は、丸トマト(露地)では蔚山市 45ha、横城郡 40ha、金海市 27ha、大邱市 19ha、丸トマト(施設)では扶余郡 322ha、釜山市 262ha、光州市 190ha、宝城郡 154ha、ミニトマトは長興郡 45ha、高興郡 30ha、威平郡 30ha となっている(表 6)。また、韓国トマトの 2002 年日本輸出は天候不順と韓国内価格の高騰により大幅に減少した(表 7)。韓国において、丸トマト、ミニトマトとも果実的な存在として消費されており、丸トマトでは砂糖をかけて食されている。ミニトマトはそのまま食されているがやはり果物的な存在であるとのこと。丸トマトは韓国では green mature 系(品種:曙光等)のものが多く見られた。

(表 6) トマトの韓国における栽培状況(2001 年)

順位	丸トマト(露地)		丸トマト(施設)		ミニトマト	
	都市名	作付面積 (ha)	都市名	作付面積 (ha)	都市名	作付面積 (ha)
1	蔚山市	45	扶余郡	322	長興郡	45
2	横城郡	40	釜山市	262	高興郡	30
3	金海市	27	光州市	190	威平郡	30
4	大邱市	19	宝城郡	154	靈光郡	13
5	機張郡	18	潭陽郡	131	西歸浦市	7

資料：韓国農林部

(表 7) 韓国からのトマトの輸入数量(ミニトマト含む)

単位：千 t

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
2000	1,293	1,501	1,756	1,414	820	230	60	41	403	1,135	1,153	1,457	11,263
2001	1,444	1,282	605	305	243	46	65	74	738	1,252	1,195	1,002	8,251
2002	413	380	250	277	164	85	91	109	430	318	371	318	3,206

資料：野菜供給安定基金「VINAS」原資料：財務省「貿易統計」

・ミニトマト

今回調査では、ミニトマトは扶余市、光陽市、和順市、金海市の4産地で行った。韓国からの輸入トマトはほとんどがミニトマトである。

ミニトマトの品種はペペやサンチェリーなどの品種も出てき始めているが、ココの人气が高く地域によって差はあるが90%近くがココである。また、2000年に韓国産のミニトマトから残留農薬が見つかり、モニタリング制度となっており、訪問した農家では、極力農薬を使用しない栽培をしており微生物農薬等を使用していた。調査時の生育状況は全ての訪問生産者で概ね良好とのこと。

ア．扶余市

扶余市は、忠清南道に属し、韓国の輸出主要産地の一つである。扶余市の栽培概況は、栽培面積順で見ると、すいか(施設)1,930ha、唐辛子 402ha、トマト(施設)322ha、いちご(施設)202ha、きゅうり(施設)170ha で、出荷量では、すいか(施設)96,085t、トマト(施設)20,668t、きゅうり 10,983t、秋白菜(露地)10,157t となっている。訪問した生産者は年間 100t のミニトマトの出荷をしているが、今年は韓国国内の市場価格が高いので国内に出荷しており、輸出はしていないとのこと。

イ．和順市

和順市は、全羅南道に属し、韓国の南部地域に位置する。和順市の栽培概況は、面積では唐辛子 372ha、甘柿 240ha、桃 1,494ha であるが、出荷量でいうと、トマト(施設)15,320t、秋白菜(露地)4,810t、秋大根(露地)2,340t となっており、トマトの主要産地である。訪問した生産者の栽培品種はココで、調査時は6月26日に定植したものが、ほぼ8段ほどまで生育しており、収穫は11月中旬まで行い、12月20日に再度定植し、2月中旬から5月末まで収穫する予定であるとのこと(表8)。

ウ．金海市

金海市は、慶尚南道に属し、釜山市の近くに位置する南部地域である。金海市は釜山市の近くに位置するという立地条件の良さと、もともと農業の盛んな土地であったことにより、韓国有数の野菜産地となっている。金海市の栽培概況は、栽培面積の順で述べると、甘柿 1,700ha、いちご(施設)297ha、にら 176ha であり調査品目の栽培面積はトマト(施設)86ha、トマト(露地)27ha、きゅうり(施設)26ha である。生産量では、甘柿 17,508t、秋白菜(露地)10,710t、にら 8,686t、いちご(施設)6,720t、トマト(施設)5,150t となっている。またトマト(露地)1,605t、きゅうり(施設)は 1,283t となっている。金海市のミニトマトの生産者は8月30日に定植、収穫は11月末から翌7月までの促成栽培であった。調査時(11/19)は高さが130cmほどになっており、生育状況は概ね良好であった(表8)。

(表8) 各産地の作型及び生育状況

都市名	定植期	収穫期	調査時の状況
扶余市	8月	10月～12月	収穫最盛期
光陽市	9月27日	11月中旬～翌3月	収穫初期
和順市	6月27日 12月20日	9月下旬～11月中旬 2月中旬～5月末	収穫最終期 (予定)
金海市	8月30日	11月末～7月	高さ130cm



和順市のミニトマト農家の選別の様子



光陽市の施設栽培の様子

・丸トマト

丸トマトは宜寧市において調査を行った。

宜寧市は、慶尚南道に属し、韓国南部地域に位置する。宜寧市の栽培概況は、栽培面積の順で見ると、すいか(施設)1,016ha、玉ねぎ 236ha、かぼちゃ(施設)206ha、マクワウリ(施設)161ha、調査品目では、トマト(施設)6ha、きゅうり(施設)6ha、パプリカ(施設)2ha となっている。出荷量の順では、すいか(施設)35,546t、玉ねぎ 15,876t、かぼちゃ(施設)12,261t で、トマト(施設)144t、きゅうり(施設)381t、パプリカ(施設)331t となっている。

調査農家の品種は桃太郎を採用しており、低段養液栽培を行っていた。4 段までしか収穫しないことから栽培期間の短縮、樹勢が衰えないことから無農薬栽培を可能としている。定植は 11 月 3～4 日で、収穫は 1 月 20 日～5 月 20 日までで、収穫した丸トマトは農協経由で 60% を輸出へ、40% を国内に出荷する予定としており、生育状況は概ね良好とのこと。



低段養液栽培の様子



同左

(3) すいか

韓国のすいかの主要産地は、露地栽培では、高敞郡 1,179ha、霊岩郡 738ha、牙山市 537ha、榮州市 461ha、光州市 451ha、施設栽培では、威安郡 2,255ha、扶余郡 1,930ha、宜寧郡 1,016ha、晋州市 966ha となっている(表 9)。また、韓国のすいかの日本輸出数量は年々減少傾向である。

2002 年は気象不良により生育が低迷したことと、4 月から 5 月下旬まで韓国では平年より気温が高かったことから需要が高まり、韓国国内の市場価格が上昇したことにより日本への輸出は大幅に減少した(表 10)。

2003 年のすいかの栽培面積は 2002 年の価格が全般的に高く推移したことより、ハウス栽培は

2%程増加するものの、露地栽培は大幅に減少することが見込まれるとし、全体栽培面積は2002年と比べて減少するとの見込みである。

(表9) すいかの韓国における栽培状況(2001年)

順位	施設		露地	
	都市名	作付面積(ha)	都市名	作付面積(ha)
1	威安郡	2,255	高敞郡	1,179
2	扶余郡	1,930	靈岩郡	738
3	宜寧郡	1,016	牙山市	537
4	晋州市	966	榮州市	461
5	高靈郡	697	光州市	451

資料：韓国農林部

(表10) 韓国からのすいかの輸入数量

単位：千t

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
2000			33	711	526	411	234	121	8				2,044
2001				321	669	485	38	51		5	16	15	1,600
2002			22	173	176	73		34		1	1	1	481

資料：野菜供給安定基金「VINAS」原資料：財務省「貿易統計」

(4) パプリカ

韓国のパプリカの主要産地は、和順郡24ha、晋州市19ha、靈光郡9ha、扶余郡8ha、金堤市7ha、華城市6ha、となっている(表11)。パプリカは韓国国内の消費は近年、高級食材取扱店や量販店もしくはピザなどで使用され始めているものの極僅かであり、ほとんどが日本向け輸出用に栽培されている(表12)。

(表11) パプリカの韓国における栽培状況(2001年)

順位	施設	
	都市名	作付面積(ha)
1	和順郡	24
2	晋州市	19
3	靈光郡	9
4	扶余郡	8
5	金堤市	7

資料：韓国農林部

(表12) 韓国からのパプリカの輸入数量

単位：千t

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
2000	56	30	21	257	328	303	247	63	6	5	106	603	2,025
2001	378	799	777	1,276	2,095	1,634	1,035	91	122	122	1,372	1,390	11,091
2002	959	855	872	1,857	1,845	1,509	1,435	377	101	155	742	1,583	12,290

資料：野菜供給安定基金「VINAS」原資料：財務省「貿易統計」

ア．調査産地の状況

パプリカ栽培は最先端技術のガラス温室とビニールハウスによる栽培がある。ガラス温室のほうがビニールハウスに比べて単収、品質が高い。今回訪問した生産者のガラス温室はオランダから輸入されたもので、また、技術者もオランダから高額な技術指導料を払って雇っていた。ガラス温室の建設費は規模によって違うが、坪当たり5~6万円、農家の栽培規模は1,500坪から6,000坪とかなり大規模である。単収は概ね50kg/坪である。最先端技術による管理のため、2002年の気象不良も調査を行った時点ではパプリカの生育には影響はなかった。

パプリカの作型はどの産地もほとんど差がなく、播種が7月末から8月上旬、定植が8月下旬、収穫が11月から翌年7月であった。栽培品種は赤色：スペシャル、黄色：フィエスタ、オレンジ：ブーギであった。作柄状況は概ね良好。パプリカはほぼ全量が輸出で全量を契約農協、もしくは契約会社に出荷している。

全羅北道にあるパプリカ貿易会社の事例を見てみると、契約基準は前年実績に基づき、1年の数量を決定している。契約農家からは全量買付しており、栽培技術はオランダから技術指導員を招いて行っている。パプリカも他の品目と同様に農薬に対してかなり厳しく制限をされており、なるべく使用しないようにしているが、使用せざるを得ない場合は各農家が貿易会社まで使用許可を求めて、許可されないと使用できないといった徹底ぶりであった。

イ．今後の動向

パプリカ栽培は、ガラス温室が主体であり、また規模も大きいことから加温のコストがかかる。今後の軽油等の値上がりによる加温コストの上昇が多く生産者、また貿易会社で大きな懸念材料としてあがっていた。今後は、加温コストの上昇及び日本市場の価格変動などの影響を受けるであろうが、栽培環境、栽培技術はかなり安定しているため急激な減少や増加はないと見込まれる。



黄色：フィエスタ



整枝作業



ガラス温室の様子



オランダ製ロックウール栽培